

なぜ、監視者を配置するのか

◎事故を防ぐ／事故に対応する

- 進路の分かりにくいところでは、誘導が必要になる場合があります。誘導にはいろいろな方法がありますが、いちばん確実なのは監視者が直接誘導するやり方です。
ただしその場合も、本当にそこに誘導が必要なのかどうか、全体のねらいや参加者のスキルにあわせてよく吟味することが大切です。誘導を行えば道迷いの可能性は排除できますが、迷うことによる学びのチャンスを奪うことにもなりかねません。
- 一方、危険箇所や私有地への進入については、積極的に防止策を講じる必要があります。その場合も、誘導するだけでよいのかどうか、検討しておきましょう。
その先にある危険が絶対避けたい種類のものである場合も、単に危険を退けるだけでは教育活動としての意味は薄まります。「参加者自身が危険予知の習慣を持つようになり、危険を避けるための方法を意識するように」させることが大事です。
- 監視者があれば、万一事故が発生した場合もスムーズな連絡取次ぎが可能となり、初期対応が迅速になります。

◎全体の進行状況を把握する

- 監視者の最も重要な仕事は、その監視位置における参加者の通過確認です。
トラブルが発生した場合、リカバリーに役立つ情報は、（誰が、いつ、どの方向に通過したか）です。この情報がはっきりしていれば、万一事故が発生した場合でも短時間で問題を解決できます。グループでの活動の場合、グループ名だけでなく構成人員に異状がないことも確認しておく必要があります。通過するのを漫然と見ていた（See）のでは、監視（Watch）にはなりません。確認して、必ず記録して下さい。
- ナビゲーションには、常に不確実性が伴います。そこで、監視位置をチェックポイントとしておけば、参加者は、そこで自分の位置を確認し、これまでのエラーを修正することができます。どこまで正しいのか、自分がどこまで出来たのか、達成状況を自己認識できるようにしてやって下さい。主体的に活動させるためには、不安を取り除いてやり、自信を持たせてやることが重要です。
- 監視位置で収集した情報を本部にまとめれば、全体識者は、全体の進行状況を把握することができます。通過情報の集積で終了時刻を見込むこと可能となります。

◎積極的な指導を行い、活動の中身を充実させる

- 「あるポストに到着して初めてそれ以降のコースがわかる」、「コース上に観察ゾーンがある」…こんな多彩なバリエーションのオリエンテーリングも、ポストのいくつかを有人ポストにし、監視者がそこで指示や指導を行うことで実施可能です。
- オリエンテーリングやウォークラリーでは、グループ内の合意形成過程そのものに学習効果を期待していることが多いので、実施中に発生する参加者同士の問題は教材と捉えるべきです。しかし、自分たちのグループ内だけで解決不可能な問題があった場合、それを放置しておくと、活動に集中して参加できなくなるおそれがあるばかりか、キャンプ全体の目標達成も危うくなります。コンパスの使い方などの技術的なスキルが不完全な場合も、そのまま続行しても活動が成立しにくくなります。
- そこで、活動の中身を充実させるためには、時として、そのときその場に応じた積極的な指導や支援を行うことが必要となります。

監視者には、直面する問題の中で「何が課題なのか」瞬間的に見抜く力が必要です。